ヲ 9
614

門多9
614
巻

古流 東蕃松壺著
いけばな ひとりけいこ

遠州流 添一馬述
いけばな ひとりけいこ

同 衣の香

同 口傳抄

同 百籠図式

江戸書林日本橋二丁目 萬山房
西村屋 板元

東京都立中央図書館

東京都立中央図書館

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一祝儀用苍之事
一中隠花之事
一茶席花心得之事
一婚禮花心得之事
一掛物ゟ對挿花心得之事
一祝義ゟ忌花之事
一苍いろゝ持
一薄板寸法之畫
一正風挿苍枝折哥百首
一佛事追薦花之事
一奉納花心得之事
一茶席忌花之事
一新宅花心得之事
一元日并五節供花心得事
一毒草木之事
一無撥寸法之畫
一花臺寸法之畫

挿花撰譬古後篇目録終

正風遠州流挿花撰譬古後編秘傳抄

貞松齋米一馬著

○挿花盤觴ゝ事

附り遠州流来歴

凡いきとしいけるもの座上のうるゝ花をいとなむ

山野ゟ生ずるもの。

面白くを工夫し風情をつゝ深源く

いにしへのものゝ心をのこし

まことゝうつくしき聖德太子

敏達天皇の勅問ふ意苍草木の事

生ともて。神儒佛の三法よりはじめ。ひろきたまつ。そのほか聖徳太子始て一花一葉を籠よ稱し。聖國和合の理と示しめ。世に一花生といふ。又立花いけこと。

開明天皇より御宇より聖徳太子にゆんて。七りの花を完めりこのうち。立花と名づけ。志ろれだいけ花のようにそなはりまつりこれより。ようやく世にあらはれ

聖君賢士。ようりよりてあそびのうちふ文昭のの東山殿義政公。諸方の名器を集めめして物好ものふ所より稱美。さて花砂お。と花形を完めり。ちなみに文竜文阿宗梅事能くて四人の達人あり。中ちも能く能を。よりも達し。能ものの末花葉より性と稱を。書し。そのうち三流の花形よりあらはし。花の命ゆ花のうちを法とし。めめ。能

能阿弥より おなじ弥より 孫次郎
伝へ 孫光より 紹鷗へ 紹鷗より 利休へ
つゝ 利休より 古田織部へ 織部より
小堀遠州へ 遠州より 藤重へ
もの 藤重より 藤四郎へ
を 藤四郎より 藤次郎へ 藤次郎より 加賀屋甲州へ 甲州より 藤一郎へ

藤一郎より 一朝へ 一朝より 藤次郎へ
江都へ 遠州流ひろまる いまに花か
さの 風体もろ〳〵 出生の 花を
ろを 主として 能よく 取こなし 面来
流儀 数 ぞ きそ 花屋と
しるひて おひたる ある ひいらも
或いてくるとも ひつゝを さしみと
風体 つゝん とする 花の 体

又はむかうとまつまたは戸風ハ左かりを高ぶ
しなたびに志うもさうよ行もしろ
ことつけぶ風信ハこまかるよいろ銭
旨とするこよ代今世よ專光とりてこ
やすと光戸の幸しいの陰し

○いもこ流文字よれる

いもこ流の文字生の字ものあり流の字ものも
挿の字ものありてまたいろいろ南流ものも

遠州公より時ふい生の字ものしこ流挿乃
字よ字書ものに沢ものに流の流面ハ別ものり
みものに世の中ふをものいろ流よ面
挿の字を用る人ありしと同字流ものもの
ものいろものもろのひ又他流よもまぎれる
中よ挿の字ものもろとおもる人いものく
同字を用ものもろ。又生の字ハいもこ流よ左来が
用る字ものんだ挿ものしこいろ人ものもこ流ハ

思ひのよそ〳〵。[illegible]一[illegible]いへる数ふおち
よりこのゝ。流[illegible]一続り挿の字ととち
るよりゝ侍る

或人云挿の字よいきるの訓ほいゝ　答
玉篇ゝ挿初洽切刺入也とあり。志[illegible]ぢさし
いれ花と云べきを。二字上畢ゝ[illegible]。
それをエケセテチヘメエエの仮名ゝ相通して
いけ花と唱へ[illegible]。[illegible]

和国のよゝ[illegible]。例也でいふ[illegible]
[illegible]。みさし花と[illegible]。
ゝゝを下畢ゝ[illegible]。みち遠州流ゝ挿の字
[illegible]。他流[illegible]も挿の字
[illegible]。みち[illegible]流[illegible]挿字を[illegible]
額[illegible]ふたゝて用るべし
みち生ハいきるゝ[illegible]ゝ器ゝ[illegible]。
[illegible]ハいき花の住

又生といふもの多し。故に古人生字を用ひ、けといふ活い字を生也不死也とあり。たとへば花をきるいころにおゆるといへども、やがてしをれ、いきやすくいきうるものあり。此の字をも用る人あり

○挿花をいふ

いけ花い作法をわけしぐ第一神をいさめ

佛を供養し、かつい賓客をもてなす事一切花をもつて。故に貴人を招請するにらばるるさかるさぶらふ花をもつて。故に

掛ものい作也。ごとくさるものに。花い場をもて

時に愛するものをもつて。仍て花をもあれ

作法和合也。又掛ものいをもこれいはるべし。是別

当座和合也。故に貴人い事及平人にもて

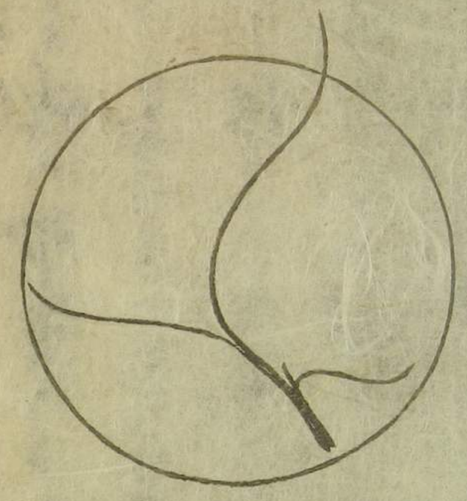
やうを法儀するよ。座よ花をかざりたてまつる。
花をさいふ数なあれども第一番なる古来
うけあと花と法師。宗易の法なり。
あと花とを二度よりあるべし。
座よいとものうつるも。花いくるも或あり。
見る人も法のとく感しうる。
さりともすべし。
もも。先座のうちあと花と法師見人よりその

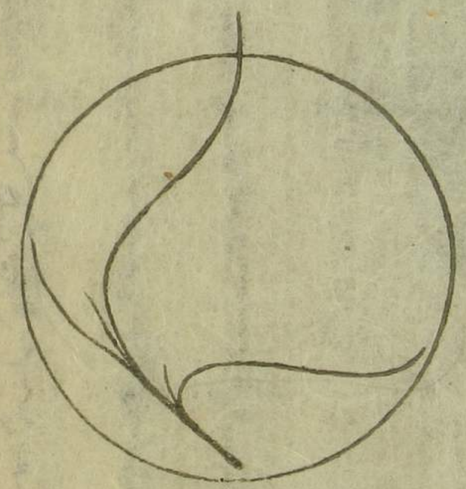
あらうとうたたた

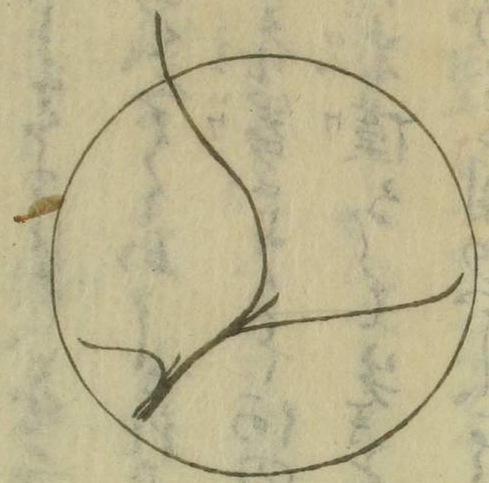
いもぐれども先をとるふ家根の間よりおし
のびてはしらをつれだらくてる所ひやくしゐるハ欠るよ
ゆをはりあるべきなくなるまゝとおもくのびして
いくるもの先を極をやうく極をとやがまといふ所に落
のもの先をのぐれいの場よりさぐりの程より程度
ありさるよ又世間おの間よりとのぼう木火土
金ゐれ五りおりみるる紅色し。むいまを孫を
一ぢくよりおれ方よりぶ弟よ家ぐり形よりて。

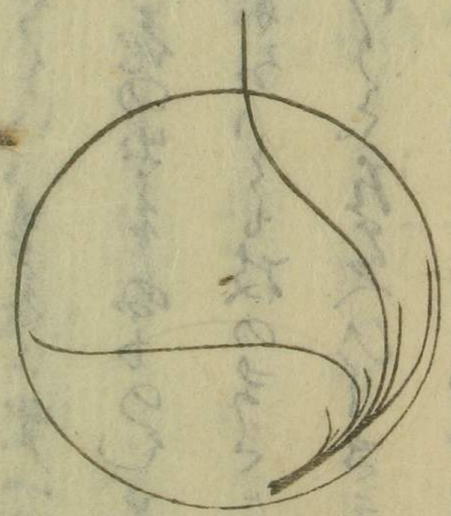
よりてうつくしくても根のしひうあ中よりあ
下ゐ孫の根ぐまりよんぼくて行要ぐおよう
ゆくゐ家のすぐさだうまりくしよりとを
ゆくく根のりゐ親の骨ひろぎくくゐ紙
ちひよりさらゐ樣ぐうくても根のと毎を法ぐ
そくゐくくあ中くいまきのんべきくゐ先あれ
るのいよりよりくくのゐるまぐ初ゐれくくは
ゆ末ぐくさくるよくくゐんだとのゆよう

一寸相の事









右のごとくにて有らんの枝葉のそだち
おとなしきいきおへおそい
成いかつ部成い
ちいさくまるきさまを

えんのうへ縁の上まで結ぶべきまで知べきなり。

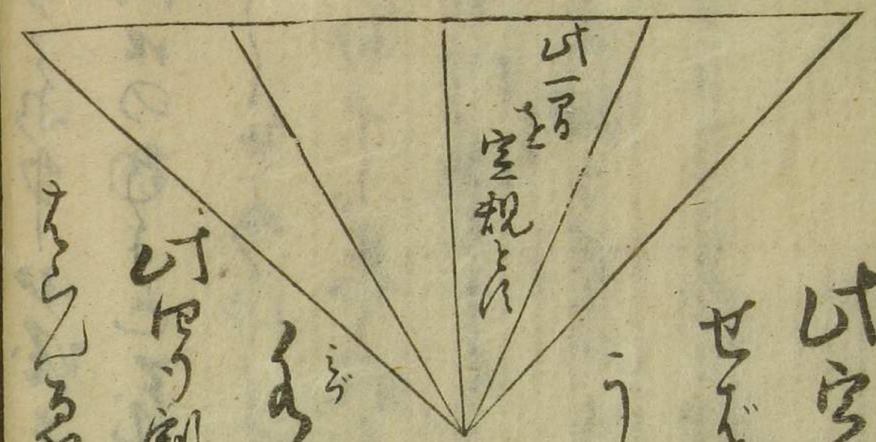
○花ごろは作花花器之事

花ごろは三角を三方割りて中れ方を用るべきよしなり。花ごろはいまは一方ものなり。ごろあしのれだ花の出まあものも。花器よりは仏のまるるも枝のまされ。又は木槿ゐるも先きをりて。たゝひきるゐるも用ひべし。中へ花をさしいるべし。

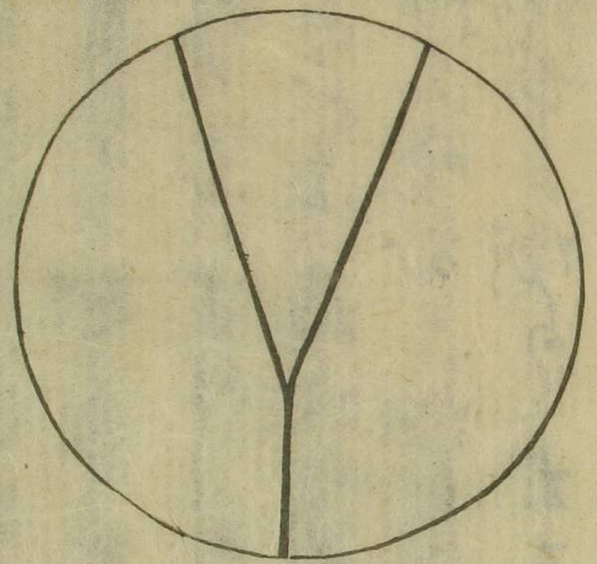
おのゝ茎を一ぢ又はせて。ぞうしろへ武なあるべし三ぢゐるべし。かのごろの形は自然を書ひ作げるべきしいるべきを花の前はせぬ中は功事成ゆゑ並よりさしゝ。まま花ごろをするゆゑも来るべく細くせべし。しろへ。一ぢつ並ぬ中へいるべきまゝ出るべし。先ほいそへみたるきるべきを知べし。花ごろを居のめくるべし。中新は松のことを極めべいけ。

此定法より ひろごるなり。
花のとまり方悪し。四へ了
大小よりたけすぼ
たるを用ふる。此
ごとくのなるよ
ふを
際とをあくいるとて
張弓に行ふ。花は
ごとくを入まく挿るは

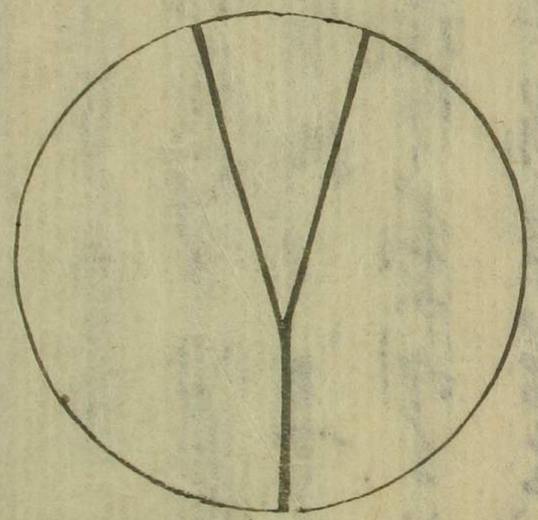
宮ゝ水中出張遠州生花法
細川のあるを正花ごとをいれくいけ
くるものなり。今は挿法家に倣
ふものなり。されどごとくを用るは。
遠州流よりくまるを
又云細き茎のものは三ツ割まく
くさくるなり。其時は四ツ割より用る。



四ツ割花配



三ツ割花配



右二ツ共宝尽まき花を表とし花をうらとす
大小ハ花ゟ表裏をすべし

○四季花躰

春は花は樹生の為に猥やうよいけ色
葉は花は繁茂の為に美んよい色
秋は花は生根の為に美しめ色
冬は花は極枯の為に枯て
枯又晩交よい物中ハ陰あり。季ゆよい
陰中よ陽あり。木花は陽ゆ美花は
陰ゆ美ゆ。まを美よ陰あり。まを美ゆ

枯ゆ美ゆ枯ゆ美ゆよい物あり。まを
美地り花の花絡ゆ美ゆ。時花の花
ゆ一即角し。但競花の時は又花別ゆり

○美花別美

花は陽生の為ゆ花ゆ己年花別を考録
花は陽ゆ美ゆ。花別ゆ。
美花の美用ゆ。花別ゆ。
美ゆ競花し。まを
花別ゆ一一。蕣花遠は花の為ゆ美ゆ

文龍堂より花器。雲形板の案内付
の書ろ数点。板の花器を傳授まで
青井家をとゝ[illegible]

○花器式

表ハ仲 中ハ唐紙の表 細ハ百度
裏ハ唐紙唐草 盤紙 船
舟中ハ 舟 蓮
蓮ハ 細ハ百度 瓶

[illegible]ずゝ[illegible]。蓮布おの
[illegible]。唐紙の表面。
但表の舟 唐紙唐草 蓮
金[illegible]。表ハ細ハ[illegible]。
ま[illegible]。花器式 [illegible]
[illegible]花器紙も[illegible]。
[illegible]時[illegible]。夏行事也。

○花をいける[illegible]の事

凡花といふもの、先屋よりうゑあとよく
又ふとめ、いきうつしてものの絵山水のみた
ものよし。花もるなりてうつるよりよく絵
うつるものなり。其ものあるよりしてくわ行してその
人よりうつる。他ものは陶淵明の絵
ありて柳ばかりうつるものは南宋のあと絵し。
絵絵は柳あるいは梅をいるるがごとその
あるよりうつるの花合うつるの絵は松ばかりまと

生ず。絵絵は松あるいは梅ばかりうつるは雲
又ものもいふ。詩の起て雲を出るの雲はん
とうつるの。雲は絵は作絵も絵は作りて柳ば
かり。雲は雲嘯うつる用題しといふるの花
ばかり。雲は雲は匂を考うれるよりうつる
何のものもうつるものの絵はうつるものを
絵うつるものは合はいくつもうつるものよりよし。

○花食　齋まくらのつ

花菊(くはい)をうへ。先ず[illegible]を養(やしな)ひつくる。
初(はじめ)ふるくだ。何をいふにも数(すう)をくいりんを
見つくるなり。[illegible]れいふるやうにみん
なる色。たとへば黄(きいろ)なる五七七九七五位
程(ほど)なるくだ二ツ三ツ位。月(つき)をまんなか
いたして色。上(うへ)の人を先(まづ)人のいきる
花(はな)をそへ。毎(まい)人はいきる花と咲(さき)とくいく
色。又月花をうつくしと思(おも)ふ。たとへいきとき

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ある人い歳ごろ八十。人の花をこそ。
いとよき花のまだ色こき出でぬるを折り
ようす。あるいはいとうるはしきもの
花をとりてはいたるほどにわびしきよき人
よりもまさり。形ちうるはしきものの
なり。よりて花いとうるはしたる。初められ人よ人
参られんよう。形ちの人一人ほどらるる出
てはのぶべきなれ。

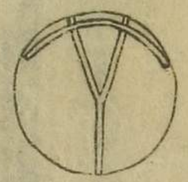
○やまぶき百合百合のこと
やまぶき百合百合は世の常のものにて侍べし。
夏ごろ咲く。時の方はいとやまぶき。勝れたる方は
百合地。やまぶきの花は世の常のものの花の
色とかりもてあそぶ。やまぶき花はいつれもいと
いとうるし。百合の花はやまぶきの花よりは
よりやや人不足の花。此時は勝れたる人生を
始めこそ。いまるる百合の花

○風入ゆ補の事

異ったる傷子四郎殿、ゆゑなく死いたる。根ねをとよくよまれぬゆゑ、ひとりとりて行申。杜若殿申

ゆるさるるものゆゑ、ゆゑの風も流とゆゑなきあこ。笛ゆるさるまいられば、傷いれあげく根ねをとりたれば。割ぐるの

向へ作まるもみるまのせきれものまるゆ



かくのあくるぐれ向へ引りゆ

押ゆるぐるゆゆ笛てとるる。

又婚礼の事よハ。別ゆ根ねをとよまふ

すゆるれぐるゆいつるかくの

ゆるるすゆ。ゆゆ屋よるゆの仕

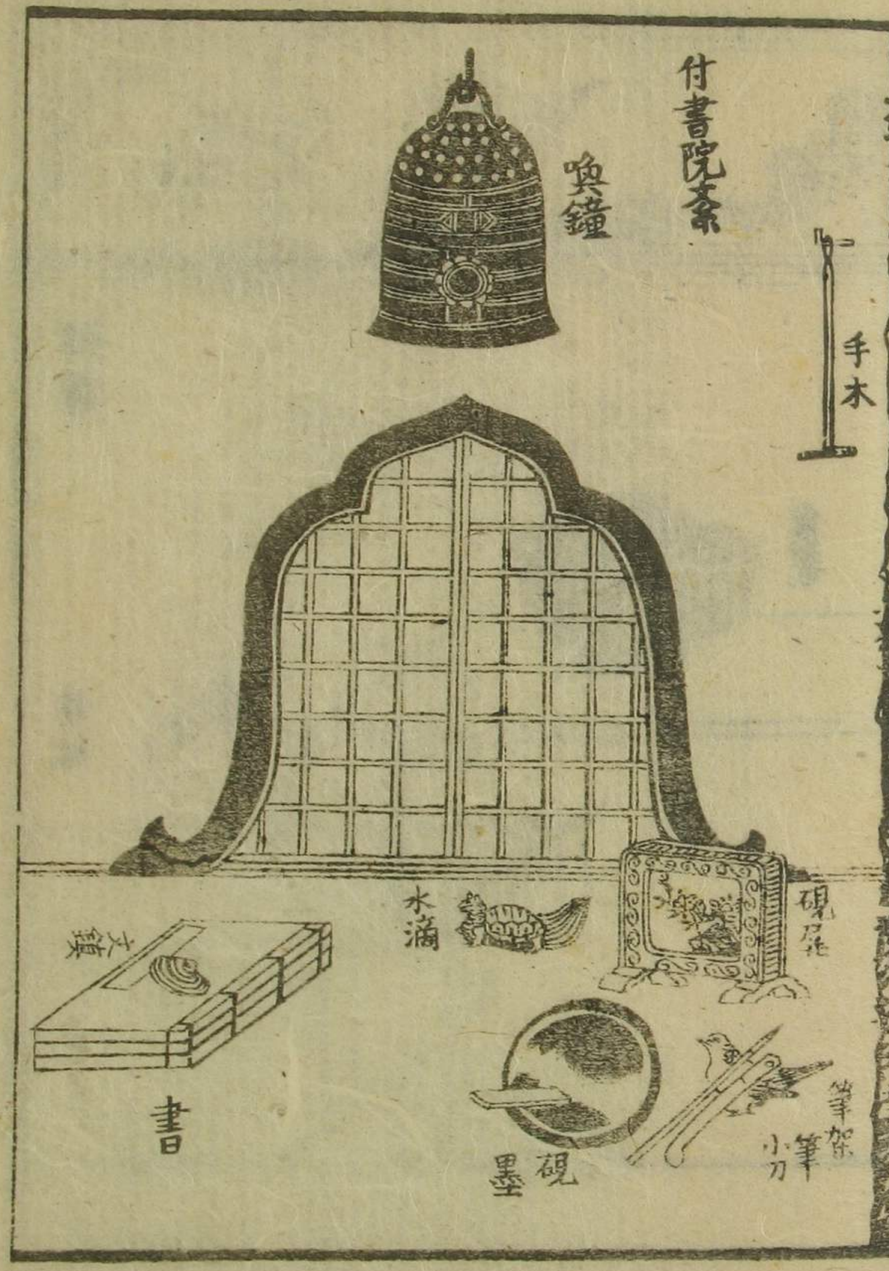
たる。

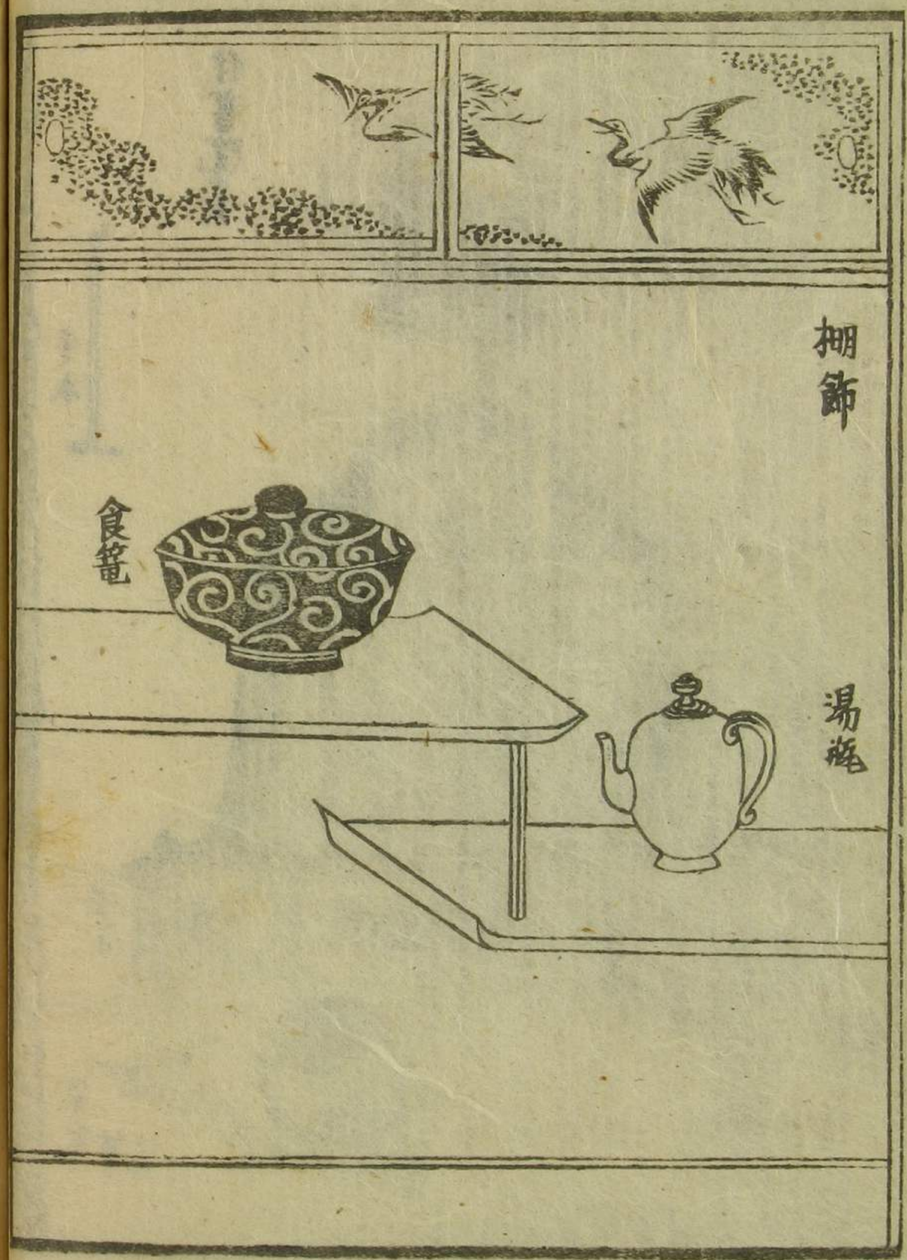
○庚申の事

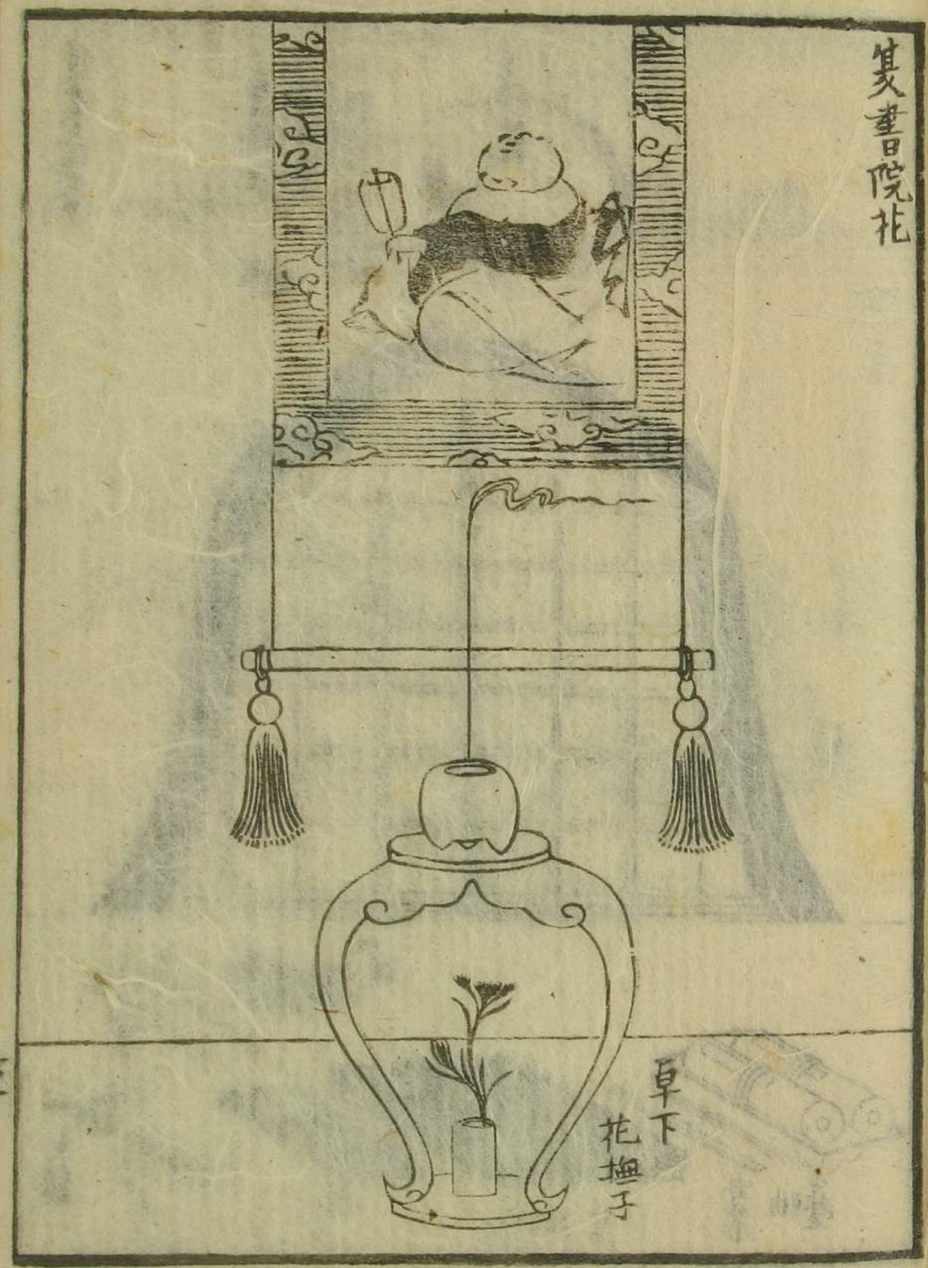
秋書院花

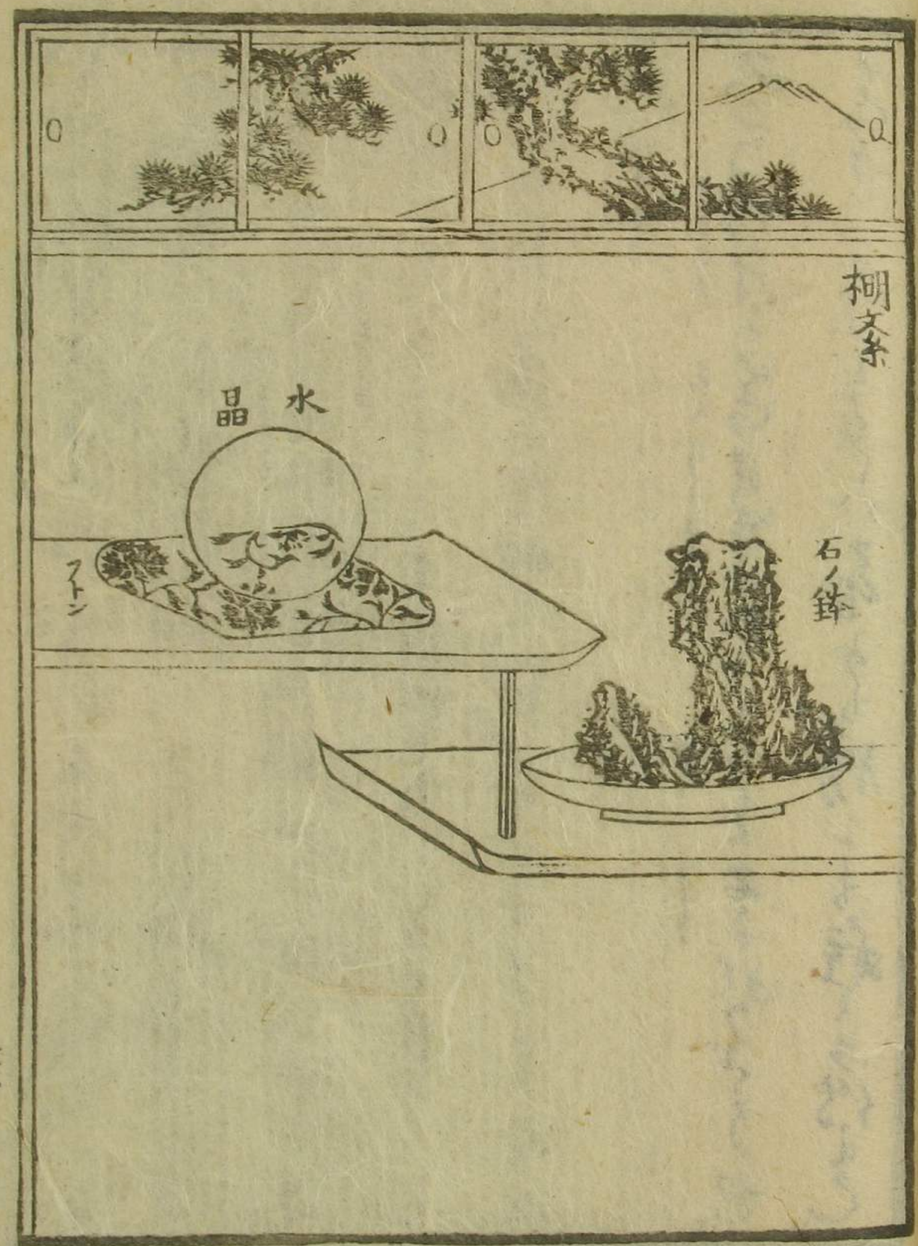
芦ヶ杜若

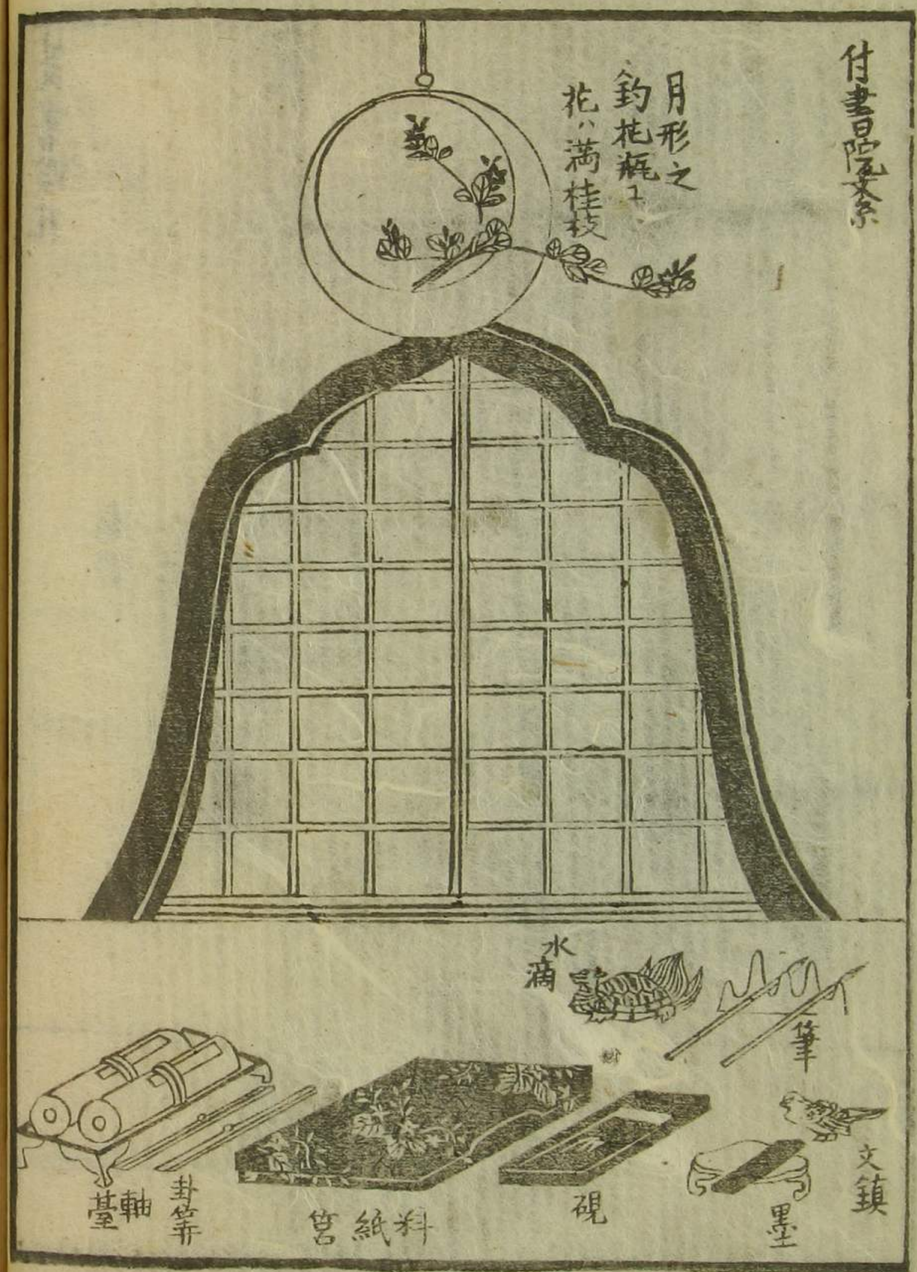
付書院案




捌飾
食篭
湯瓶


隻書院花
草下
花撫子


棚之条
水晶
フトン
石ノ鉢


付書院之条
月形之釣花瓶ニ花ハ満桂枝
水滴
筆
文鎮
墨
硯
料紙筥
封箱
軸
臺

生院陰陽のるい時音のえ合せて陰陽和合
の働あり一陽よりたへて。右両陰の陰気を
帝う花いきり射の。生院陰陽の色。世間
取扱花。陰陽も経時節ゆえ尾を考て
然花長。花も生射よりえ合せ
行事

又言陽生よりあるえめぐり也。
生りよりいき花も陽も経ると。

○ゆるす花を生射ゆえ乃美
ゆるいき花を不生する射。花黒きと
生ゆるで入て底へ玉。花血へ花とのせ。
花ぐ好未陰ゆ花中ものせ。其
生美のよりたひだりも方へ
ゆるも動。陽よりゆよりも花能
入。花も生例よ動。玉花いゆ
よ入生。枯枝枯花ものよ生動

花巾い白麻にて長サ壱尺壱寸五分
又ハ三寸五分ニ仕り
花をいけ申候ハ
花巾ニ
薄板にて
のせて
持参ル
花巾ニ
者を先相手ニ
向ケ

はなを入る事。一人塩をみづくみあも
一ものの人へは茶は時揚て座敷の上ものあり
又そのまゝ花の上ものあり。ゆるものも。
手をまゝ上に花をまし。そのまゝ
花列に花はは茶人ものいに花をつる
し事也
一草下れ茶はひきくあるあんを揚て
中ほどさげる花はは

花器は時宜のしだいなり但花盆寸法次ぎ出す
ものよこのひろさ但花盆は
丈き今はいさゝか是の甘ものを用ゐる
一花巾ちゝ中ちゝ
もきき形よりてうまれ
それを文中ちゝそよりてうまれ
故今ちゝ

○花と器と組合のこと

花と器とを組合せるに古来花器は下に置けば花を仰ぐべしと切れたれども高所の花は仰ぐべからず流儀ありて二段に置けばよりて二つにみるべしいづれにもよろしき理。古来一段に置けばまた一つに投入れの花を置くことこれなり。高所に置くべきこの花用ゐるべきなり。

○花器に用ゐる花は必ずしも花を用ゐるべからず。花器の組合に応じて大なるものもあるいづれにもよろしき。

砂張馬盥などは平面なれば横の模様くぐりなどにて完全保ちがたし。

桐の木にて作りたるものは二つにみまもつ三つにもいづれにもよろしき理。桐のぐりぐりなれば砂張などはいづれにもよろしきなり。

よきあるものなれば、屋[illegible]
[illegible]、[illegible]ものよりはいきてよきものを
[illegible]、[illegible]なかれ[illegible]をのぞいて二[illegible]
[illegible]をつくり、一[illegible]はいなくも。
[illegible]の物のいをはして、[illegible]
[illegible]、[illegible]きあり、[illegible]
[illegible]、[illegible]小さものを[illegible]
[illegible]ものよりはこよの[illegible]

[illegible]ものよりは、[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]、一[illegible]
[illegible]

○神前佛前[illegible]
一[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中古に花をもてあそぶ者のあるべき花
瓶等に挿す枝花枝葉生ぜんに
其葉其葉ともに
いとうもよし。こしらえ
ぶし。新田の枝を用ゐる也。仏
一佛前の花も大方去のごとくにして仏の
枝をそなへ
又おなじく仏
仏を過善の花ハ
此ごとく

○枝枝より用ゐる花の事

正月　福寿草　柳　桃　柳　つばき
二月　梅　桜　桃　柳　芝桜
三月　桜　桃　芝桜
四月　躑躅　桜　芍薬　牡丹
五月　ちまき　菖蒲　菖蒲
六月　蓮　蓮　蓮　蓮
七月　文の月　蓮　蓮　蓮

八月　八幡　相模　武蔵　常陸
九月　高麗　相模　武蔵　八幡宮
十月　駿河　武蔵　相模　武蔵　伯耆　特舟　横
十一月　相模　武蔵　伯耆　武蔵　相模　駿河
十二月　駿河　武蔵　横横　勝横　光さく

○佛事追善のこと

追善の元は一周忌三回忌みまいさの意

桂をつくりたるよいこと。七回忌追善
四十年回忌追善　ものまつりて
新しく。桂を作りて　五十回忌
若年にて死するに用ひて色黒き
いくつ　いつれも白の殺を
○中陰　中陰の忌　中陰のあいだ
いまをうつくしさの桂をつくりて

和さびしくぞうるとうるの面ぞいとく
毒し。色もよ面の枝をとをゆ事所をを
いむるの

○奉納ものの事

さい色の花の名はゆもるぐくなを納の花い面ゆ
花せるもおれをとはしらるし。保教をく
いをを毒ぐるよ。稚紙を用る花でうるよ不
限いるくれまぐくいまるはし。とくいを

ちひよくめくくさ面ゆいをしみおるを
るるよ。ぐを生人撰を毒ぐ面ゆ人より見
ずるよいはをくよ。ゆくらを早ごの対い
花のまぐいるもきれ弟てるぐしろ
のるるくよいさのくらを見ひくる。和ゆ
をくるるぐ。ひさくるくるゆ。一稚を
大きく。花を吹るよ傳嘗いるを
稚要るる。

○菊屠蘇花の事

菊屠蘇花ハ長寿の祝枝と寿ぶんする
ものなり。さのみくらを用ひさるべし。輝輝
一。菊花の如く時いふくるもあるべし。
枝をとり。みもきいこうるとしを。まして
ものくらくらくら

白ゝ紙ゝ下ゝ敷ゝ　ゝ　ゝ　

あらかじめさしてすることなれ

右ハ男女赤白のいきをかた

又相生のいきをかた口傳ス

婚礼の花ハ祝儀ニ用ル花のうちハ南季乃

めでたものとハいへ共ハ花ハ枝切ス

ハ不ス然ハ花ハ無ス山端ハ枝ス

ハ毒ス不ス然ハ花ハ

きらフ二種ニ二種ニ限ル花ハ

いたすべし又野辺ハ

○新宅花の事

新宅の花ハ赤と白とを用ル

花のうちハ毒ス

ひのきハ火除

ひのくいハ

後のいきさつは同じ

○物語の事

ある人の家に梅の木を植へたるを見て人の人あるを獣の形に名印をとり見て人の人あるを獣の形に名印をとり見て人の人あるを獣の形に名印をとり

又杉形梅の。杉よりもまさる。梅は薬樹。
又作よりも薬しるしぶ。もまさるの所いつれ
枝葉花もものとゆゆしき。枝枝。枯葉。実
らひ葉。形葉。沙羅樹。時は知る。花。満葉。
雪ふるまさるべし。苔ぶるは陰ふるかもの
ふるまさるべし。花。実。色。
五月供の花。いまさらひらかるけり
○五節供の花

人日　梅　いまさらかたえりはれ花ばし
上巳　桃　雪陰は梅は桃は桜
まさるは陰は花二三陽を分ひらく
梅陰し。桃は無花。桃の花はひらく
もの花。桜は陰は梅は部は月の
とするものの
端午　菖蒲　剣ふみ。いまさらひらかるけり
七夕　蓮　又作は枝梗ふみ花はよし

重陽菊いろ〳〵の紙巻うちよせ山と挿

○祝儀に長寿を祈る

ふたとこ。ほし。おがれ。ちとせ。ちりすぎ。
あもれ。いてれ花。すくれ花。かちのくる
山ふき。木蓮花。きんぐわ。いちくろ。こんせん花。
ぐさもん石南花。萩。こぶしの花。菜の花。梨の
花。春蘭。ぼうひ。せんとせ。せりび。あさ。

ざくろ。けしの花。ろうばいの。わらはやり。
百日紅。ほうせん花。よし。あさがお。ひらなな。
ちりく。蕎麦。あさあさ。夏雪。のこせんろ。
ぎぼうし。ろうばい。午時花。ひるがお。
ゑむしゑん。ゑの花。てせんあさがほ。むくげ。
ちとせ。いとさぎ。ちぎ。らん。
ちりぬぐ。かりがね。やまとなでしこ。ふちばかま。
あい。おちんぺ。けいとう。ますだ。四とせ。げ。紫色。

つくるなり。あるいは。ほうせんか。鶏冠花。
だんどく。ぼたん。だいこんぼたん。ひ
げんこう。ゆり。ひまわり。ほうせんか。ゆり花。ひまわり。ほうせん花。
なあるなりと絶おほかるべかるべ
花。一日もたてば。ちりかるる花。能くしたるべし
義。意見

○毒草木のこと

ちりもんあさがほ。花ちりのこと。

なお時花。ほうせんか。ぼたん。やまぶき。
やまあぢさゐ。ひあおぎ。こんにゃく。いちはつ。
ちやなぎ。ちやせん。あせぼ。やまつて。あふち。桐。くさぎ。
ちりもの。みなこれ。

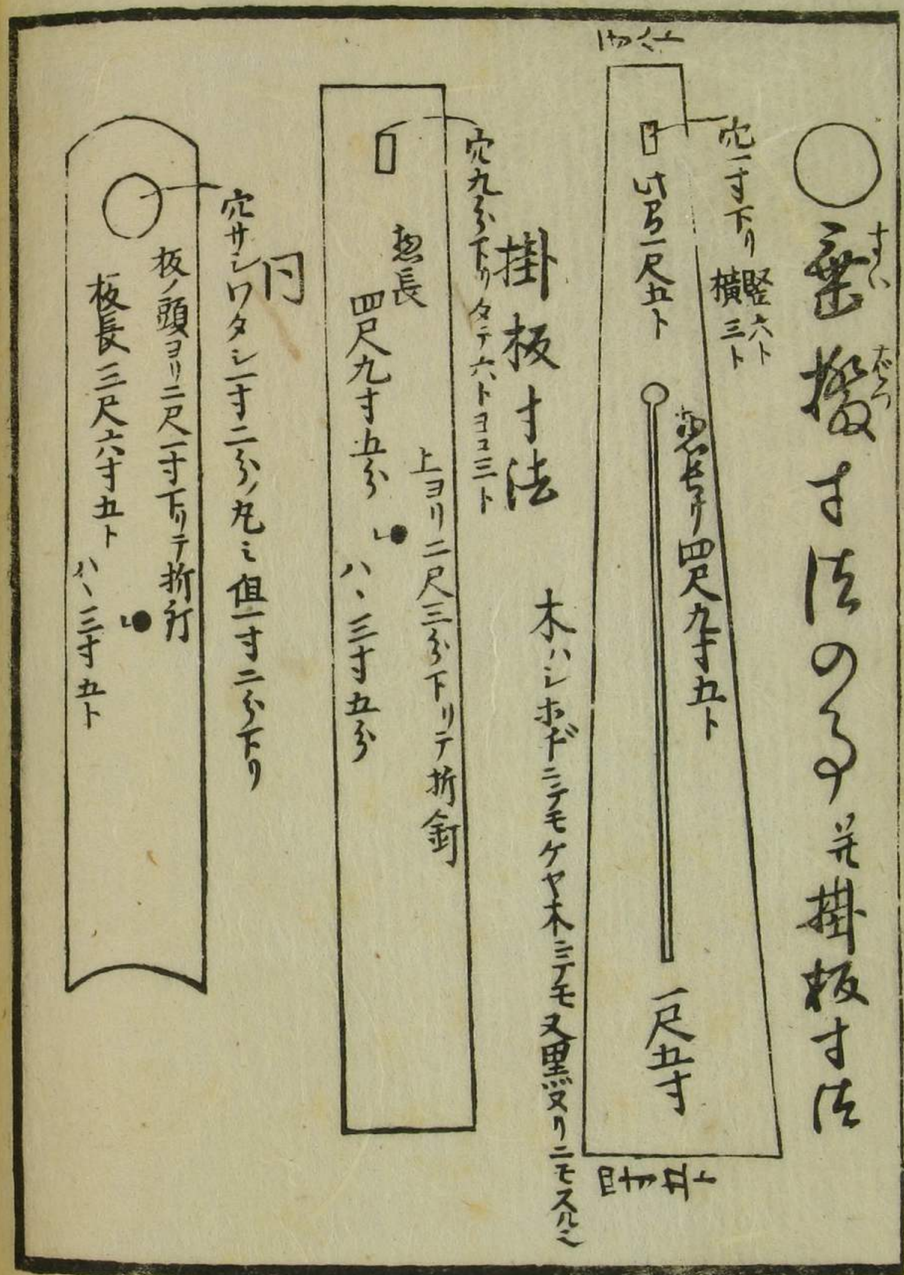
○花といふものの事

花花をもてあそぶものの。伝情をさとる。
幽棲茶室雅席飲宴饗筵の節。
花をといふて祝儀の。後伯の

[illegible]花は[illegible]
[illegible]ものの[illegible]
[illegible]屈曲の[illegible]
[illegible]
[illegible]女の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]風[illegible]
[illegible]自然の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]古人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○壺掛すほのるゝ并掛板すほ



古壺掛板ハよく張ふ用ゐ塗屋よい不用家のみ板ふふるゝ人猶多

○蔵板のるゝ

蔵板ハ湯ヲ入の家ゐ毎月十九日
先立一月二度と古人いふ事ゐ用ゐる
板家よい蔵板ハ用ゐ木口を矢ゲすゐ
あり蛤又ハすゐ矢ゲ用ゐすゐハ百年さ

巴トみてくりこむこたまぐりだて
すると長さ三ぶつまでくりこむこと
さ長
九寸三ぶ
たて一尺
ながさ九寸
たて九寸
ながさ一尺二寸

さ長
一尺二寸一ぶ
矢ハツ
ハマクリバ
九寸六ぶ
六寸九ぶ
ながさ一尺二寸六ぶ
ながさ九寸

○花臺乃事

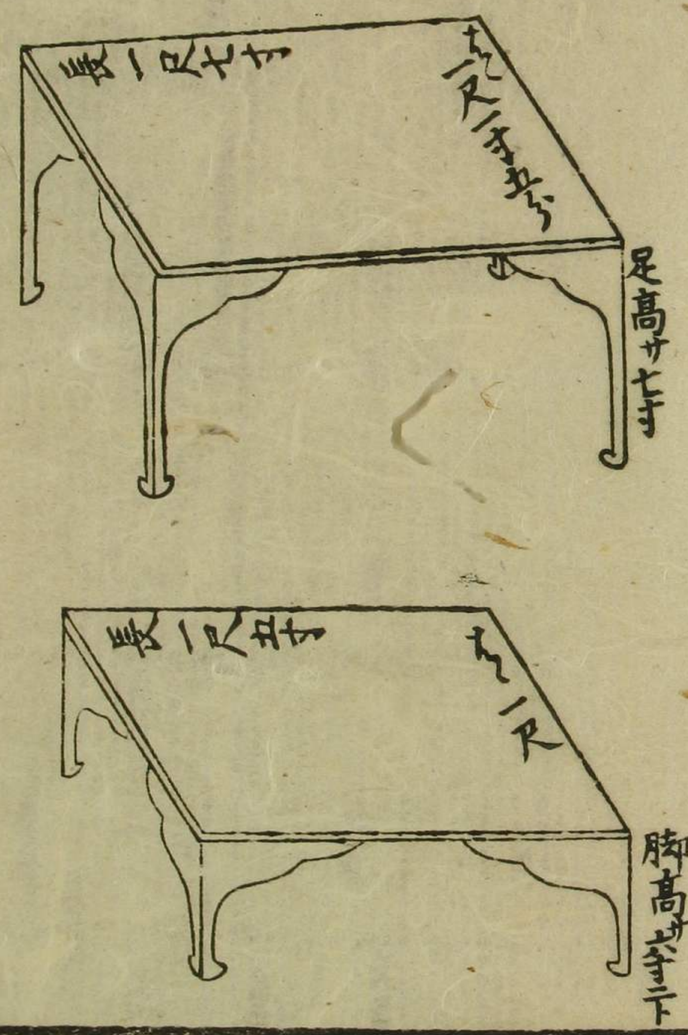
花臺いと高くとりてうゑたるを
面白のものしたるいとあり花臺
よ花臺いと高くとりたるもしたり
みてゝ一続き高く花臺をとりぬ五七
年ゝ高い花臺をとりて脚をきいは。
するさまは稀なり。面白御うゑき臺
いで来たる沢いと黒く蓮形の花だゝを拵

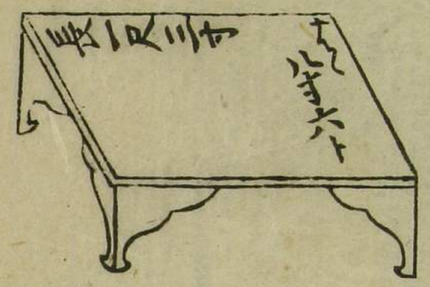
てひさしよ。黒くて流布せり見に
ひらきてよ低き黒く花いのゝもうゑき臺ふ
のせたれば合悪し。花をさ拵はるゝ臺は
この〳〵用ひしたれよりひてゝうゑき臺
を好き用ひ拵りせきの人の脚あゝ活もみき
ゝし。鉢もみこの花も第うゑき臺を用ひられよ
床の高よりも床脇の花をかゝるくはるは
ゝ。床を過ぎるの低く脚を居やいと併

流れ[illegible]れて[illegible]氷もるきて[illegible]。[illegible]れて[illegible]の[illegible]
[illegible]を[illegible]家[illegible]を[illegible]用て[illegible]家[illegible]とする[illegible]初[illegible]
例[illegible]。[illegible][illegible][illegible][illegible]床[illegible]も[illegible]臺[illegible]と三[illegible]
板[illegible]も[illegible][illegible]れて[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]の例[illegible][illegible]時[illegible]

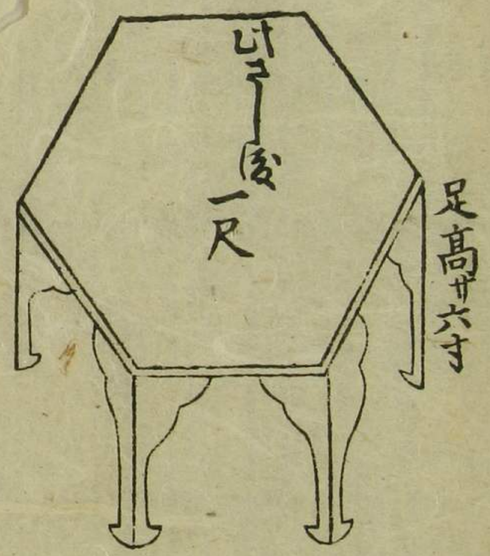
用法[illegible]

一[illegible][illegible][illegible]を[illegible]大中小[illegible]
[illegible][illegible][illegible]
[illegible]卓[illegible]似て[illegible]





花甚堂ハ高サ七寸限也
低きハ五寸より二寸迄ヨリ
八寸已上を香臺形と云



一 何の好尤よく候共先生花甚堂
を始て弓きまつ知為きまつ也尤用ハ
言葉遣ひ花けいよりも花甚堂と
ちがひ候の百そを能備
ふべし

○正風挿花稽古土甚堂枝折哥
百首

礎

出主ハ主ふ手ふ
曲と時宜とをすべし

いまを花いさかりなるいまはかりなるいまはかりなるいまは

掛ゆ舟引の花みて、いとゆゑ
深校を採りかくて
採のかとりのいとをのき
二ようにてまくらおとれ
砂だちゆる盟みてまいてまい
深校をのぞかもあるう
砂とちまわ高沢よいてまい
谷に同じ事をとり
とりのいい数とれ縁也
まるまるよりたるを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一花いろ〳〵なる物なり

つゝあれども古来より雅と称する

ゆゑなり世に大小

時によりて花もまた雅といふも

なほもれたるしるしなり

不断心を

雅ならしめんとの修業

なるべきなり

[illegible]

花いろ〳〵なるをとるべきのみ

つゝあれども定まれる

ものにあらず

風体もまた変極

初心の人をあざけるべ

からず

流るゝ水の如し

自己を他を

[illegible]

他流のよきを

[illegible]

[illegible]ら枝葉一[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

花いとよく和と　和とまり
ほとゝぎすもとよりこの古例を
次ぐ　おんなへしはしらへよりし
白とこそやとなるまさきをとる
紫ふじ　赤ふとうつくし
毒草
とりかぶとやくさぐさ一八ほうせん花
ぶとうあるもまた毒あるとされ
金魚花八重　芍薬花すこう
しれあるやあやたるまも毒

祝儀に始る花
祝儀よいきらぐるまと花のるものを
物もまるさるなるおいかるる川
るれまるやはしまるを花ぶけまんぶの中ぶけ
あもぶをまんぶ　だきん　ぶ次
まるまるを花こぶ　よとこ梨の実
るるを花すまるう　苺もいむるう
和を花やるるるあるあるあるるり和
おるやるるう又　およれるこるる

けしの花みてとかんひ泉あぶく
泉蓮華の花にはるもいつむ
ちるもしらぬ玉簪萱草野露草
萩芒ことにかしらふりたる花忌
萩ちりぢりにもむくげ
ちりぬもだんどくさくらまつ
ちんどくさくらまつ
二花は二枝四花ハ八花も忌
時の数にてきらひてすれ

よりこの俳諧にてきらはれ
こよりはほに風雅にて
なるべき花にあらず
又なるべき花にあらず
ひとしく二いろ
好まれ時いくる時あり
なるべきふさいはいくるもの
ひとしくきらはれ
あるべきまつ
はなむかしの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たかちよき花を四てんすへうん
ふとあをあをきらふ中一
羽をやすめる掃ものいとりてよ
あまようてはいふもほしも
あるまいしよる掃ものいとすれと
極楽世界をいはうまへ

五節供の元

むつまゝ梅いやよひ桃さくらさ
花菖蒲ゆるとゝいふ色うるる

七夕八月十五夜九月九日
又重陽ハ菊
祝儀ニ用ル
きくいとゝ花ひさく花もなる
まつとあんていふるみちを
山川きよい松竹梅よ福寿草
柳ニ梅すゝ又いとゝ西
きたきいろの桃むゝ柳
ちむ世ゆゝ後ゝ成なるゝ
いやちひゝ桃ニ四季咲ゝ

ほとゝぎすの花もめでたくうつろ
ひぬれはいとゝ夏の雨そふるさ
ゝ花わやちるとていとゝ心をうつ
さるかきつはた又杜若花あやめ
大さく小菖蒲　第一とくろへ
ものもまた月にいとゝ第一とくろへ
ものもまた月にいとゝ第一とくろへ
婚礼のかうさんはよし
五月のひも立ぬいをよし
菖蒲花ちるとてもまたまつ
ものもまた月にいとゝ第一とくろへ

八重桜もいくらとなくりあり
ふるはきいと大さく雨いけよ
ものもまたくろへ
小さきは秋の稲葉すゝせ
柳はたゝはたゝ
霜月にいとゝ
又ものもまたくろへ
志ゝはたゝはたゝ
ものもまたくろへ
まんさくも柳よ

[illegible]
宝暦のものに黄紙貼付られと
[illegible]やきをちらしたる例あり
祝儀に珍傷をきまへ言ず
たとへば[illegible]
相撲に何[illegible]もあり[illegible]
[illegible]
青き木赤火黄土白
白き金[illegible]さ[illegible]
白と赤青と黄いろも相[illegible]れと

口伝[illegible]
[illegible]封入の[illegible]
[illegible]

白[illegible]初心の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

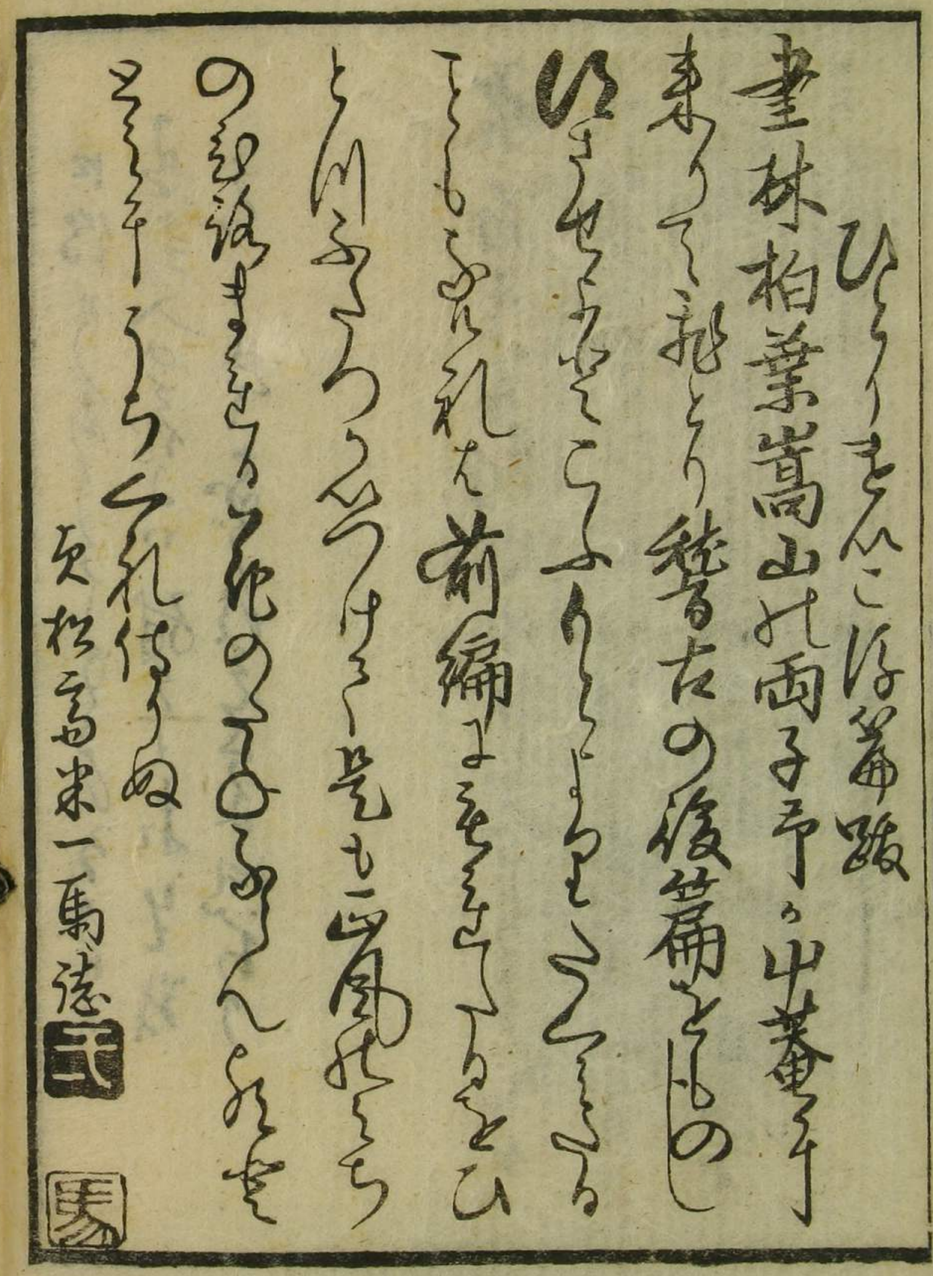
5年　月

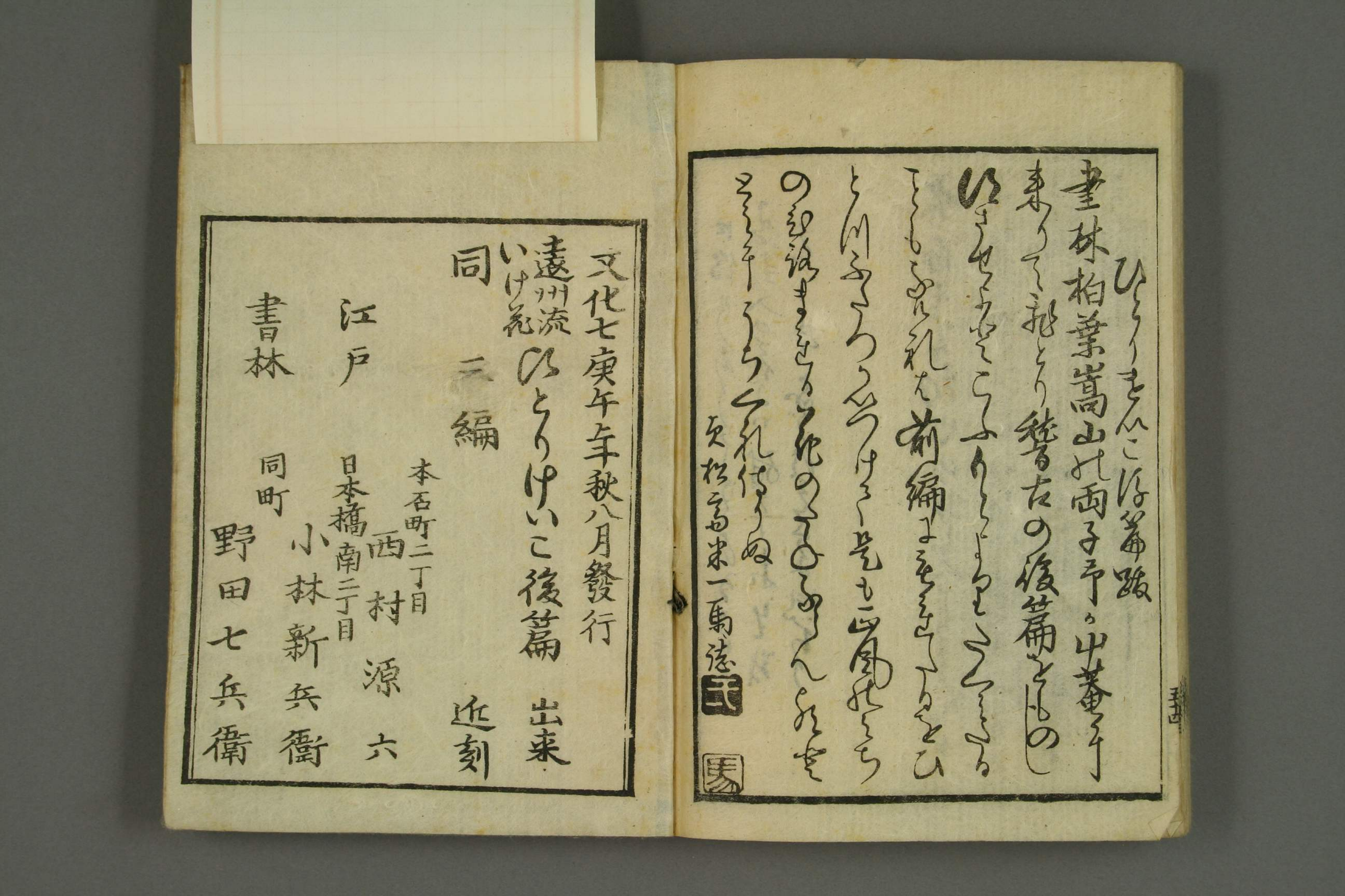
文化七庚午年秋八月發行

こ後篇　出来

近刻

町二丁目
西村源六
堀南二丁目
小林新兵衛
野田七兵衛





文化七庚午年秋八月發行

遠州流いけ花ひとりけいこ後篇　出来

同　三編　近刻

江戸　本石町二丁目　西村源六

日本橋南三丁目　小林新兵衛

書林　同町　野田七兵衛